CONTENTS

COMBAT

2016.Jul.
No.484

7

Cover Design
Favorite Graphics Inc.
Cover Photo
Tomo Hasegawa / Tomoyuki Orimoto
©WORLD PHOTO PRESS 2016
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

【第1特集／リボルバー】
010 特集　浪漫と現実の仲介者
リボルバー
THE REVOLVER
012 Talking about the "REVOLVER"
014 戦闘銃、進化の歴史
018 米二大メーカー
コルトとスミス&ウェッソン
028 My Favorite Revolver
俺たちのリボルバー
056 銃番勝負　番外編
Ruger SP101 / Mod.5718
060 日本のリボルバー
064 中山蛙のリボルバー思い出ばなし
068 Evolvement of Revolver
Air　Soft　Guns
エアソフトガン列伝
072 タナカワークス
PEGASUS REVOLVER
076 リボルバー・エアソフトガン・カタログ
【第2特集／APS】
119 サバゲ三等兵責任編集!?
それいけAPS!
120 KEN × TAKU 青空インタビュー
APSカップのコースが決まるまで
122 APSに初参戦！
狙え!!ぴっちょりーな☆スペシャル！
129 マルゼン前田社長インタビュー
130 APS開発秘話
132 サバゲ三等兵APS部　京都酔夢譚　完結編
134 キーパーソンに聞く
137 APS専用銃カタログ
138 読んで覚える
TakuのHOW TO Shooting
射撃のススメ！　特別篇

004 COMBAT FRONT LINE
084 The Equipments of the U.S. Force
[現用米軍装備カタログ]
装備カタログ番外編
実物画像から'90年代特殊部隊装備を再検討する
●解説：松原隆 ●撮影：山崎 学
094 WESTERN ARMS
HOAG K.K. SPECIAL
DX EDITION
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
098 WESTERN ARMS
BOB CHOW SPESIAL Ver.1.5
VINTAGI EDITION
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
100 WESTERN ARMS
FACE OFF 1911
DX EDITION
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY
102 兵装嗜癖
●by fujiwara
104 ミリいじ技研
●by fujiwara
105 Militaria Roundup!
復刻版WWⅡドイツ軍レーションと日用品パート2
●解説：菊月俊之
116 PROJECT NINJA
●morizo(東京装備BAKA)
118 PRESENT
146 トイガンニュース
146 東京マルイ　KSG
148 東京マルイ　M40A5
150 東京マルイ　CQBR〈BLOCK1〉
151 東京マルイ　GLOCK22
152 WA　TRPオペレーター《ウエポンライト・モデル》
152 WA　コブラ1911《ロイヤルブルーVer.》
153 タナカ　S&W M500 3+1インチ《ステンレス・モデルVer.2》
154 タナカ　S&W M1917 .455HE2 4インチ・カスタム《SJフィニッシュ》
155 タナカ　S&W M60チーフスペシャル《ステンレス・モデルVer.2》
158 NEW GENERATION STYLER
●fujiwara
170 Goods & Accessory
174 走って撃って楽しんで
サバゲ放浪記　ゆい散歩　最終回
千葉編　●取材：上矢ゆい
210 編集部お薦めのタクティカルギア大図鑑
Tasmanian Tiger　TacPack 22
212 サバゲ三等兵
●by 織本知之
216 中田商店グッズ
218 S&Grafグッズ
140 トイガンズ・ジャンクション
188 ブラックホール
189 GAME OVER THE TOP
193 バックナンバーリスト
194 ミリタリー・コレクション
196 レア・ミリタリー・コレクション
198 A STITCH IN TIME
199 帰ってきた「今さら聞けないコンマガ的ミリタリー雑学」
ヘンリー少年のミリ雑講義
200 狩野健一郎のシネマ放浪記
201 狩野健一郎の新作DVD紹介
202 USシューティングライフ!●鮫島宗貴
204 戦車兵通信　WORLD OF TANKS
206 コンバットマガジン・インフォメーション・センター
207 読者プレゼント応募方法
208 編集後記

特集

浪漫と現実の仲介者 リボルバー

REVOLVER

ピースメーカー、パイソン、チーフスペシャルにセンテニアル…。
僕たちを熱くさせてきた銃は、いつだってリボルバーだった。
早撃ちの浪漫に彩られたそれらは、しかし、
現代においても、法執行機関などでなくてはならない一挺として扱われている。
信頼性の高い、実用的な銃としての役割は変わることがない。
今回は、浪漫と現実を行き来する銃、リボルバーを徹底解剖してみた!

●Photo: 長谷川朋之

米軍制式拳銃を作り続けたコルトの歴史

コルト M1873シングルアクション・アーミー 5 1/2インチ

米陸軍の要請で、バレルを短くしたM1873のバリエーション。砲兵隊に配備されたモデルであったため、アーティラリーの名前でも呼ばれている。*Product by TANAKA*

M1849コルト・ポケット

M1851ネイビーと、ほぼ同じデザインの小型モデル。設計はネイビーよりも遅かったが、民間市場で小型モデルが求められていたこともあり、ベビー・ドラグーンに次いで登場。.31口径で、3インチから6インチまでのバレル・バリエーション、5連、6連のシリンダー・バリエーションが製作された。*Product by MULE*

M1848 ベビー・ドラグーン

後部を角型にデザインしたドラグーン・タイプのトリガー・ガードを備えた小型モデル。護身用として製作され、都市部などでシェアを獲得した。*Product by MULE*

SAA 4 3/4インチ

1873年に米陸軍制式採用となったSAAは、民間でも人気が高まり、4 3/4インチをはじめとするバレルの短いバリエーションが登場「シビリアン」のニックネームで普及した。*Product by TANAKA*

コルト・ウォーカー・モデル

テキサス・レンジャーでパターソンを使用した経験のあるサミュエル・ウォーカー大尉にアドバイスを受けて製作された、米陸軍用のリボルバー。.44口径で、全長約400mm、重量約2000gという大型モデルだ。*Product by HWS*

コルト M1873シングルアクション・アーミー (SAA)7 1/2インチ

1872年に開発されたコルト初のメタル・カートリッジ・リボルバー。翌1973年に米陸軍が制式採用した。米軍にとっても初めて採用したメタル・カートリッジ・リボルバーであり、開拓史を象徴するハンドガンとして、現在も多くのファンに支持されている。*Product by TANAKA*

1800年代から鎬を削る アメリカの二大リボルバーメーカー

コルトとスミス&ウェッソン

わずか16歳で、現在に引き継がれる自動回転式弾倉を考案した サミュエル・コルト

銃器の発火方式が、フリントロックからパーカッションへと移行しつつあった1814年、アメリカのコネチカット州ハートフォードで、銃器メーカーの雄、「コルト」を創設したサミュエル・コルトが誕生した。アメリカのフィラデルフィアに在住した銃器研究者が、フランスで開発された雷汞（=らいこう。水銀を硝酸で溶かし、アルコール処理で粉末化させたもの。衝撃、熱、摩擦で発火する起爆剤）を利用した、手軽なパーカッション・キャップを考案したのが、同じ1814年。フリントロックに変わる新たな発火方式が、急速に普及していく中で、サミュエルは幼少期を過ごした。

16歳になったサミュエルは、カルカッタ行きの貨物船に水夫として乗り込み、その航海中に、回転する操舵輪（当時の河川用の船に利用されていた外輪型推進機という説もある）から、回転式弾倉を考案した。という話は有名だが、束ねられた複数の銃身を回転させる連発銃は、マッチロック（火縄銃）の時代に考案され、ホイールロックの時代にも作られていた。フリントロックの時代には、回転式銃身の他、銃身後部に、回転する弾倉を備えたモデルも作られている。ただし、これらは1発撃つごとに、手動で回転させるメカニズム。サミュエルは、それをハンマーの動きに連動させて、自動的に回すメカニズムと、パーツ構成を新たに考え出した。とするのが妥当だろう。それでも、画期的なアイデアであったことには言うまでもない。186年という長い時間が過ぎた現在でも、リボルバーの回転構造には、サミュエルのアイデアが踏襲されている。

ニュージャージー州パターソンに、コルト最初の銃器会社を設立。

アメリカに戻ったサミュエルは、自動回転式弾倉を組み合わせたリボルバーの設計図を描き、ハートフォードのガンスミスに製作を依頼した。発火は、1806年に実用化され、1814年に画期的な進化を遂げたパーカッション方式。最新のシステムを組み合わせた、当時最新のリボルバーだった。

しかし、このリボルバーには、改良すべき点が多く、その後もいくつかの試作品が製作されたという。様々な職に就いて資金を稼ぎながら、試作リボルバーを作り続け、サミュエルの友人だったボルチモアのガンスミス、ジョン・ピアソンに製作させた“コルト・ピアソン・ロングライフル・モデル”で、一応の成功を見る。その後もさらに改良と試作を繰り返し、1835年にイギリス、翌1836年にアメリカで、シリンダー型連発銃の特許を取得。それを基にニュージャージー州パターソンに、サミュエル最初の銃器会社「パターソン・パテント・アームズ製作所」を設立した。ここで量産されたのが、“コルト・パターソン・モデル”だ。

サミュエルが、最初の銃器生産会社を設立した1836年は、「アラモ砦の攻防戦」で知られる「テキサス独立戦争（1835年10月～1836年4月）」が展開され、テキサス共和国が誕生した年。前装式単発銃の戦闘能力が、限界を迎えていた時期であり、誰もが手軽に連射できる銃器の登場を望んでいた時期でもあった。サミュエルが特許を取得し、量産した“コルト・パターソン”は、そんな時代の要求を満たす最新式のリボルバーだった。

コルト再生の原動力になったウォーカー・モデル。

画期的なメカニズムを内蔵した”コルト・パターソン”には、No.1のポケット・モデルから、No.5のホルスター・モデルまで、5種類の基本バリエーションがあった。口径は、.28、.31、.36などで、現在の感覚からすると、非常に小さい。当時、戦闘用として主に流通していた前装・単発銃は、.50口径前後。5発の弾丸をハイスピードで発射することができたパターソンだが、威力という点では、決して高く評価されなかったようだ。

サミュエルが目指したのは、言うまでもなく、米陸軍の制式採用だったが、結果的に売り込みは失敗に終わる。新しく複雑なメカニズムであったため、精度の高い加工が必要だったこと、工作機械がまだ充分に発達していなかったことなども、パターソンの量産を難しくした。同時に、前装・単発銃に比べて5倍近い価格設定であったことも、政府関係が消極的にならざるを得なかった理由だといわれている。思うように利益が上がらず、経費ばかりがかさんだ「パターソン・パテント・アームズ製作所」は、設立からわずか5年（1841年）で倒産した。

会社としての成功は得られなかったものの、自動回転弾倉のリボルバーを世に送り出したことの他に、サミュエルは銃器の発達を促進する大きな功績を残している。それは、パーツの互換性という概念だ。量産を目指せば、当然必要になる発想だが、1800年代前半の銃器には、まだその生産理論さえ存在していなかった。交換や修理が必要になったパーツは、ガンスミスがひとつひとつ手作業で削り出し、すり合わせをして組み込み、機能を回復させるというのが、当時の常識。同じ銃器メーカーが製作した同じモデルでも、個々に独立した違う銃器になっていたわけだ。現在でも、高度なテクニックを持つ「ガンスミス」が称賛される伝統的な傾向は、この頃の銃器事情から引き継がれていると言えるだろう。

1845年、パターソンの会社を畳んだ後、港湾用の「電気式機雷」の開発などに従事していたサミュエルを、米陸軍大尉、サミュエルH.ウォーカーが訪問する。コルト・パターソンが量産されていた頃、それを採用するテキサス・レンジャーに在籍したウォーカー大尉は、パターソンの戦闘能力を高く評価していた。テキサス共和国が合衆国に併合されるとともに、テキサス・レンジャーが米陸軍の一部になったことで、軍の上層部にパターソンの採用を進言。生産監督官として、1000挺の注文書と共に、サミュエルに面会した。

ウォーカー大尉は、豊富な実戦経験に基づく貴重なアドバイスを提供し、サミュエルはそれをまとめて新型リボルバーを完成させた。口径は、大幅にボアアップした.44で、弾倉は6連装。コルト・パターソンの大きな特徴だったフォールディング・トリガーは、常時露出した通常のトリガーに設計し直され、同時にトリガーを保護するトリガー・ガードが設けられ、現在の常識的なデザインが採用された。サミュエルは、ウォーカー大尉への敬意を込めて、この完成した新型リボルバーに、“コルト・ウォーカー・モデル”の名前を冠した。ちなみに、米陸軍の制式名称は、“コルト・アーミー・リボルバー M1847”だ。

パターソン工場の倒産で、生産設備を処分していたサミュエルは、コネチカット州でマスケット銃などを生産していたイーライ・ホイットニーの工場に生産を依頼。米陸軍に1000挺のコルト・ウォーカーを納品した。

メタル・ケースの普及とピース・メイカーの誕生

コルト・ウォーカーで得た利益を元に、サミュエルはコネチカット州ハートフォードに、新工場「コルト・パテント・アームズ社」を設立。念願の米陸軍指定銃器工場となって、“1848コ

My Favorite REVOLVER
俺たちのリボルバー

リボルバー好きな弊誌スタッフたちがここに集結！
ピースメーカーからM500まで。
各々がこよなく愛する名銃を、実銃を中心に徹底的に語りつくした
リボルバー偏愛主義の企画、その名も「俺たちのリボルバー」。
ここに始まる！

01 ◆ Duke Hiroi
02 ◆ Ken Nozawa
03 ◆ Tomo Hasegawa
04 ◆ Muneki Samejima
05 ◆ Taku
06 ◆ Hiro Soga
07-08 ◆ Shotgun Marcy

●Photo: KEN NOZAWA

THE REVOLVER CONTENTS
Chapter:06

EVOLVEMENT of REVOLVER Air Soft Guns

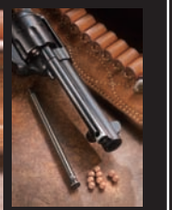
エアソフトガン列伝

Tanaka Works "SAA Civilian"

エアソフトガンを使ったファストドロウ（速撃ち）は、タナカのピースメーカーによって確実なものになった。充分なパワーと命中精度、そして耐久性があるからだ。弾を発射してターゲットヒットが義務づけられたファストドロウ競技は、実戦的で難易度が一気に高まる。タナカ社の製品がこの競技を実現できた。筆者のガンマニアの原点"ピースメーカー"。タナカ"ペガサス"シリーズには500マグナムをはじめS&W社リボルバー各種、スタームルガー社のスーパーブラックホークなど、豊富なラインナップがあるが、個人的にピースメーカーがイチオシのアイテム！ 他にアーティラリーとM10、センテニアルなどを所有。

シリンダー内にガスタンクがあるため、フレームは実銃とまったく同じ構造を再現できる！ モデルガンも驚くリアルさ。各種グリップが無加工で取り付けられる。

（上）ローディングゲートを開けると、しっかりカートリッジが見える。（右）ハンマーをハーフコックにして、シリンダーを回すとガスチャージノズルが現われる。



さらに凄いのは、"エジェクターロッドチューブ"をBB弾マガジンにアレンジされている点だ。

シリンダーが回転するたび、エジェクターロッドチューブからBB弾が給弾される。画期的アレンジだ！！

タイプ"R" エアソフトガンの奇跡?!

リボルバー式のエアソフトガン。その存在自体がじつは凄いことなんじゃないだろうか。今回のリボルバー特集でその事を再認識することになった。

これまでリボルバータイプ（以下Rタイプ）のエアソフトガンは、様々な機構が試されてきた。ガス式だけでなくポンプを内蔵したエア式、さらにカートリッジの有無など各種あった。なかには外装だけリボルバーという製品もあり、命中精度は良かったものの寂しさもあった。やっぱりリボルバーというからにはシリンダーが回転して欲しいもの。ところが、回転するがために命中精度が安定させ難くなってしまう。さらに6発という装弾数も、撃って楽しむには物足りなさを感じさせた。

命中精度と装弾数。この2点がRタイプエアソフトガンの弱点だったが、これらを高次元で解決した画期的な製品がある。タナカワークスのペガサスシステムシリーズと、東京マルイのガスリボルバーシリーズだ。いずれも、これまでのどのRタイプエアソフトガンとは違う、画期的なシステムが盛り込まれていたのだ。

タナカワークス・ペガサスシステム

シリンダーにガスタンクを内蔵。シリンダーの表皮部分が、BB弾の装填と送り込み機構として機能する！

文字だけでは不思議に思えてくるタ

●Text & Photos: 長谷川朋之

Photo：US NAVY

The Equipments of the U.S. Force

[現用米軍装備カタログ] 第141回

実物画像から特殊部隊装備

装備カタログ番外編

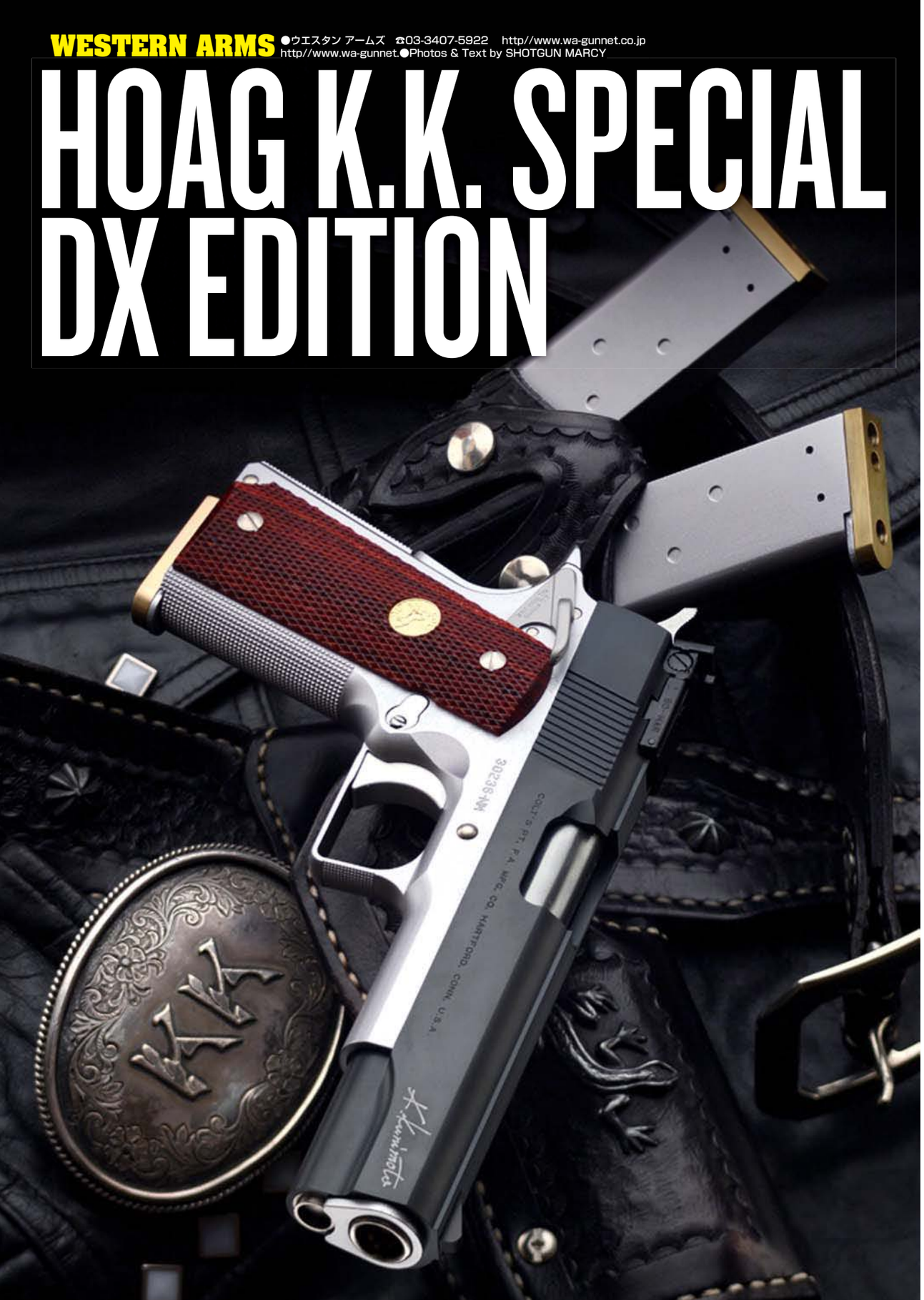
'90年代を再検討する

●解説：松原隆●撮影：山崎 学
●協力ショップ：
LAZY CAT（http://lazycat.jp/）
TRi'S（旧特小工房）（http://tri-ss.com/）
Gamis（http://www2.ocn.ne.jp/~gamis/）
トイソルジャー（http://www.toysoldier.com.hk/）

日本がネット社会になったのは'90年代初頭。今ネットで検索してみても'90年初頭の米軍特殊部隊装備の情報量は少なく、当時の出版物の方が上だ。筆者の様な初老コレクターとなるとアメリカの特殊部隊＝NAVY SEALSでありグリーンベレーやデルタフォースであった。装備メーカーはEAGLE industriesをはじめLBTやBHI、アメリカン・ボディ・アーマー（ABA）社であり、プロテクティブ・テクノロジー（PT）社ぐらいのものか。数少ない雑誌の情報から'90年代初頭の装備をコツコツと集めて現在に至っている。集め始めて20数年も経つと当時の装備知識にも間違いがわかったり、知らなかった装備や画像等が海外の知人からのメールで判明したりで、今ちょっとした'90年初期の特殊部隊装備がマイブームとして再燃している。今回は中間報告として出てきた実物画像とその装備を簡単に紹介してみよう。その後に深く装備カタログで各部隊装備として紹介していきたいと思う。

WESTERN ARMS ●ウエスタン アームズ ☎03-3407-5922 http//www.wa-gunnet.co.jp
http//www.wa-gunnet.●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

HOAG K.K. SPECIAL DX EDITION



ホーグK.K.スペシャル《デラックス・エディション》

- ●全長：220㎜
- ●銃身長：114㎜
- ●重量：約915g（実測値）
- ●装弾数：21＋1発
- ●価格¥5万2,920
- ●絶賛発売中 !!

1970年代に配布されていたJ.W.ホーグのパンフレット。各部のカスタムと当時の加工費用が掲載されている。国本さんがオーダーしたのは、各項目のカスタムアップを全て盛り込んだフルハウス・カスタムの製作だった。

伝説のコンバット・カスタム、ホーグKKスペシャル

日本のトイガン・ファンに、M1911コンバット・カスタムの存在を初めて伝えたホーグK.K.スペシャル。ウエスタン アームズ（以下：WA）を創設した国本圭一さんが、ホーグに特注した究極のカスタム・ガバメントだ。

1970年代の初め、実弾を使ったシューティング・テクニックを極めるために、単身アメリカに渡った国本さん。すでに朋友となっていたセル（マーク）・リードと共に、ファストドローやガンスピンのテクニックを磨く日々の中で、マークが所有するカスタム・ガバメントに出会う。M1911を使用した近代的なコンバット・テクニックが普及し始めた当時、カリスマとまで言われたジェームス・W・ホーグに特注したカスタム・ガバメントだった。

マークが所有するホーグ・カスタムの緻密な造りと、他を圧倒する優れた命中精度の虜になった国本さんは、早速ホーグにカスタムを発注。当時、スプリング類やアクション系のチューニング、サイト・コンビネーションの交換など、部分的なチューンナップは行なわれていたものの、全面的なカスタムアップはまだ珍しかった。国本さんが望んだのは、正にその全面改修。ホーグにとっても数少ない、フルハウス・カスタムの製作だった。

ベースは、アメリカに渡ってすぐに購入した1971年製のM1911A1ナショナル・マッチ（以下：N.M.）だった。誰れの注文にでも応じるホーグではなかったが、マークの推薦と、国本さんの実績を認めて、快くオーダーを受けてくれたという。

約２ヵ月後（1975年）にホーグから届けられた“ホーグN.M.コンバット・カスタム”。コルト純正をはるかに上回る機能美と、25ヤードでの着弾をほぼワンホールにまとめてしまう精度が、国本さんを驚かせた。このコンバット・カスタムを手にした事で、国本さんのテクニックは、飛躍的に向上。.45オートの先駆として有名な、レイ・チャップマン（ビアンキカップの開催会場として知られる“チャップマン・アカデミー”の創設者）、ジェフ・クーパー（高度な

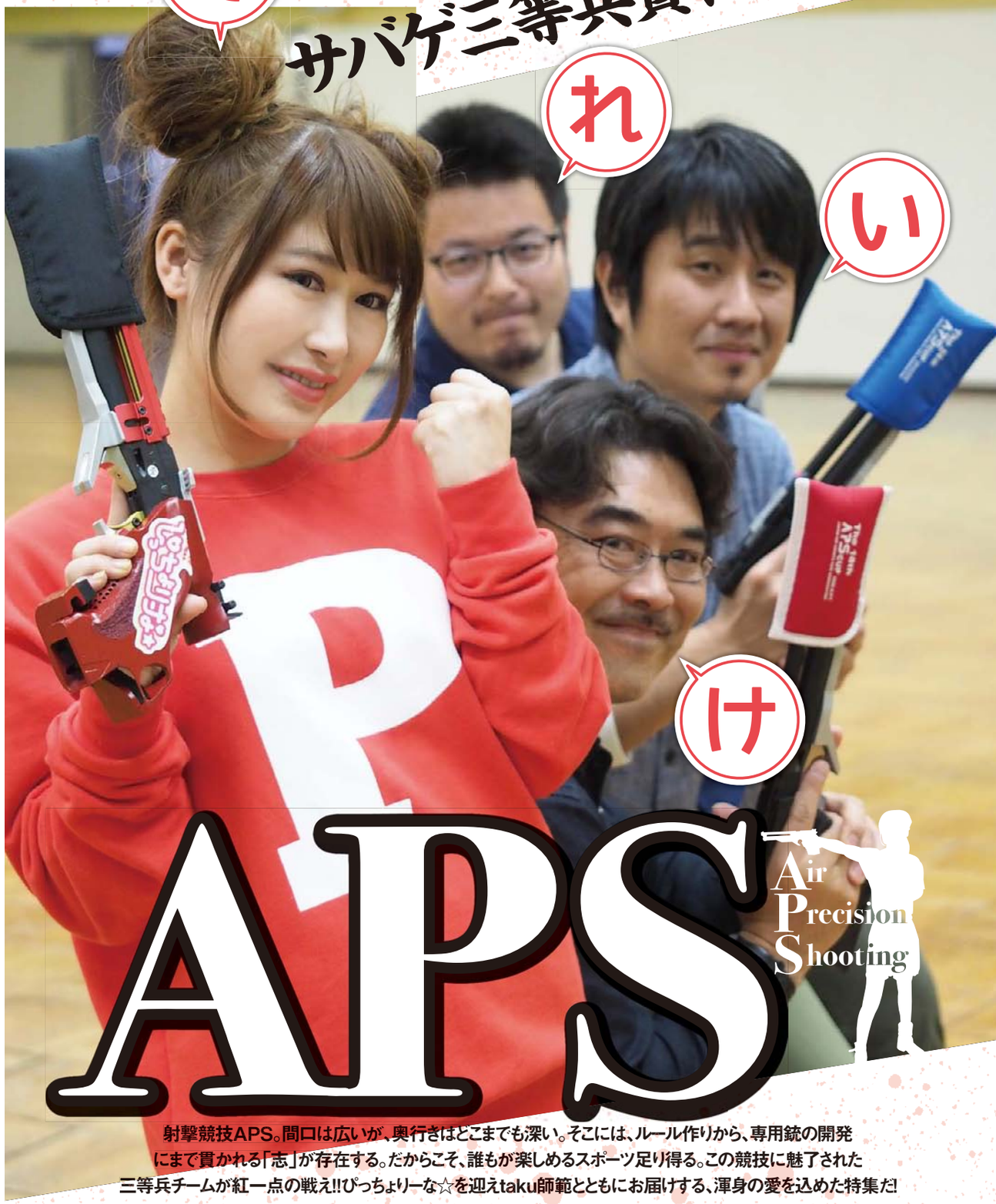
操作性を極めたスムース・フィニッシュのショート&ワイドトリガー。アルミ削り出しで製作されたハイクオリティなカスタムパーツだ。

綺麗な木目とシャープなチェッカーを施したカスタム・ウッド・グリップを標準装備。マガジンには、5㎜厚のブラスバンパーがセットされている

サバゲ三等兵責任編集!?

それいけ APS

Air Precision Shooting



射撃競技APS。間口は広いが、奥行きはどこまでも深い。そこには、ルール作りから、専用銃の開発にまで貫かれる「志」が存在する。だからこそ、誰もが楽しめるスポーツ足り得る。この競技に魅了された三等兵チームが紅一点の戦え!!ぴっちょりーな☆を迎えtaku師範とともにお届けする、渾身の愛を込めた特集だ!

協力：日本エアスポーツガン協会　http://airsportsgun.com
ホビーショップフロンティア　http://frontier1.jp/

狙え!!ぴっちょりーな☆スペシャル!!!

我らサバゲ三等兵APS部。シャープシューターに揃って昇級したものの、何か大切なものが欠けている。それは「艶」。
ならば、と、今回は「戦え!!ぴっちょりーな☆」嬢を新メンバーに、APS競技の最高峰、グランドマスターのバッチを持つ
「世界のTaku」師を指南役に迎え、士気高く奥深き世界に飛び込んだのだ!
(ご指導ご鞭撻はフロンティア“APSの鬼”山中社長)

戦え!!ぴっちょりーな☆ここに参上!

どんなに小さなトラブルも火に油を注いで炎上をエンジョイする荒くれサバゲ三等兵&世界のTaku師もコレには参った。お願いです着替えてください。

「えー!なにこれタンパツエアコキヘアトゥリガーなのなんなのまじコレあたしやだコーフンしてる!」と初めてのAPS競技銃を手に興奮する、戦え!!ぴっちょりーな☆女史。(以下、長いので敬称略、さらに縮めて『ぴっちょ』)

「え一、キミたちには決定的に足りないものがある」
眼鏡の奥を光らせワールドフォトプレス社の智将と言われる服部“ハンニバル”編集長が言った。
「そうかもしれない」額にほとばしる汗を拭きもせず千葉隊長が言った。室温は冷房20度に設定されているが発汗は止まらない。
「しかしそれがなにかわからないす!っす!」大胸筋から大粒の汗を浮かばせシェフ狩野も応える。言いながら他所の会社の鴨居での懸垂が止まらない。
「…うーん」脂汗を垂らし広報オリモトが唸る。昼の背油豚骨ラーメンが当たって突き上げる便意が止まらない。
「諸君に足りないのは色だ」服部編集長が断言する。
「そりゃ、シロクロページですもんねー!」(笑う汗まみれ男汁三人衆)
「違う! 諸君に欠落しているのは艶やかさである!」
「あ。(納得)」
と、いうワケで業界最強の艶やかさをもったミリタリーアイドルである「戦え!!ぴっちょりーな☆」女史に社をあげてコンタクトしたのであった。